

研究の概要

1. 研究主題

学ぶ意欲を高め、実践的な行動力をもった児童・生徒の育成」

かかわり合う力，適切に判断する力，自分を生かす力を培う小中一貫教育のあり方

(3年次)

2. 本校の課題と全国的な問題

(1) 本校児童生徒の課題

「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」の3つの力を培う。

(2) 学習意欲の問題

「学ぶ意欲」を高める。

(3) 学力の問題

基礎・基本に支えられた「確かな学力」を保障する。

本校では平成11年度から4年間、小・中学校の教育の連携を深める研究開発学校の指定（文部科学省）を受け、教育研究に取り組んできた。21世紀の学校教育に求められているのは、豊かな人間性を育み、生涯にわたって意欲をもって学び続ける基礎を培うことである。教育とは、未来に向けて子どもたちのもっている「かくありたしの像（こうなりたいという像）」と、今ある「自己」を広げる営みであり、子どもたちの希望と可能性の幅を耕していくことが学校教育では重要になる。したがって、義務教育の9年間の果たす役割は大変大きく、小学校と中学校が連携して連続した学びを保障し、小中一貫の教育課程を編成・実施していくことは、非常に意義のあることである。4年間の研究開発の中で、教職員のカリキュラム・マネジメントに対する意識の向上、各教科・領域での連携の充実、小・中異年齢間交流の定着などの成果が見られた。と同時に、「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」の3つの力が十分に身につけていない、という課題が見えてきた。



また、中央教育審議会でも指摘されている、子どもたちの学力低下や学習意欲の欠如は、現代社会における大きな教育課題となっており、本校においても取り組むべき今日的課題である。

そこで、本校の児童・生徒の実態をふまえた上で、「学ぶ意欲」を高めることと、「確かな学力」を保障することをねらいとし、平成16年度から研究主題「学ぶ意欲を高め、実践的な行動力をもった児童・生徒の育成」を定め、研究・実践に取り組んでいる。

3．育てたい人間像

本研究の目的として、次のような人間の育成を設定した。

生涯にわたって、意欲をもって学び続けることのできる人間
豊かな人間性や社会性をもち、人間関係を築くことのできる人間
自らの個性を見出し、他者とのかかわりの中で積極的にそれを伸ばしていこうとする人間

4．昨年度までの研究

(1) 第1年次(平成16年度)の研究の概要

研究の第1年次である一昨年度は、本校の子どもたちの次のような実態を改善していくことからスタートした。

- ・自分自身でものごとを判断し、実践に移したり、行動したりする力の弱さ
- ・人間関係を築いていったり、その関係を調整していったりする力の弱さ

このような問題点をさらに分析した結果、「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」の3つの力が不十分であるととらえた。これらの力は、「確かな学力」を身につけるために必要不可欠な力であり、研究主題の「学ぶ意欲」「実践的な行動力」とも密接な関係にある。また、これらの3つの力を培うことは、人間形成の上でも大切なことであり、これらの力を培う学びを考えることは、授業を通した人間形成のプロセスを考えることにつながる。そこで「学ぶ意欲」を高め、「実践的な行動力」を育成するために、「学級づくり」と「授業づくり」について具体的に構想することを通して、研究・実践を深めようとした。

「学級づくり」においては、「どんな発言や行動も尊重され、これまでの経験や知識が生かされるような学級、一人一人の存在が認められ、いつも先生や友だちに肯定的に評価されるような学級づくり」をめざし、小学校、中学校それぞれで実践に取り組んできた。「授業づくり」においては、各教科の特性を活かしながら「確かな学力」を育成するとともに、「学ぶ意欲の高まり」と「実践的な行動力の育成」をめざした授業のあり方について、具体的な実践(ケーススタディを通した授業研究の実施とその評価)を通して追求してきた。「学ぶ意欲の高まり」と「実践的な行動力の育成」をめざした「授業づくり」のイメージ図、「めざす授業」のパターン図(自らが主体的に「真理に対する責任を担う主体となる」授業、学んだことを活用する授業、さらに自らが学んでいく態度を育成する授業)を作成し、各教科・領域の特性を生かしながら授業構想を行い、それぞれの教科・領域で授業を提案していくことにした(平成16年度『研究のまとめ』研究の概要)参照)。研究の中で、具体的にどのようにその達成を見取っていくのか、その視点を明確化していくことや、実施した授業が意図に合うものだったかを検証していく方法についても模索してきたが、残念ながら具体的な考えを提案するまでには至らなかった。

(2) 第2年次(平成17年度)の研究の概要

そこで、研究の第2年次である昨年度は、「学ぶ意欲を高め、実践的な行動力を育てるために、いかに授業をつくるか(授業構成)」ということをテーマに、「授業づくり」を具体的に考えていくことに重点をおいた研究・実践に取り組んだ。

「学ぶ意欲」を高めるための授業づくり

「学ぶ意欲」は、「授業(学習)」における「活動」の中で生まれ、育てられるものである。「意欲は活動に依存する」と言っても過言ではない。そこで、「学ぶ意欲」を高めるための授業構成のアプローチの仕方として、「活動」からのアプローチを考えた。ここで言う「活動」とは、目標達成に向けて、学ぶ意欲の高まりを意図して行うものであり、児童・生徒(個人または集団)によって展開される行為をさす。本時の授業の中で、どのような「活動」を展開したいのかを考え、授業を組み立てていくことで、本時の「問題」や「課題」、さらには「支援」も見えてくるようになる。子どもたちの「知的好奇心」「有能さへの欲求」を満たす「活動」を設定し、展開することで、「学ぶ意欲」の高まりを生み出していくことができる。そして、「学ぶ意欲」を高めることは、「生涯にわたって学び続ける力」を身につけることにつながるのである。



実践的な行動力を育成するための授業づくり

「実践的な行動力」とは、「基礎・基本に支えられた知識や理解を生かし、自分を生かすために、自然・社会・人に積極的に働きかけようとする行動力」である。つまり、「学んだことを自分の生活に生かす力(生きてはたらく力)」である。

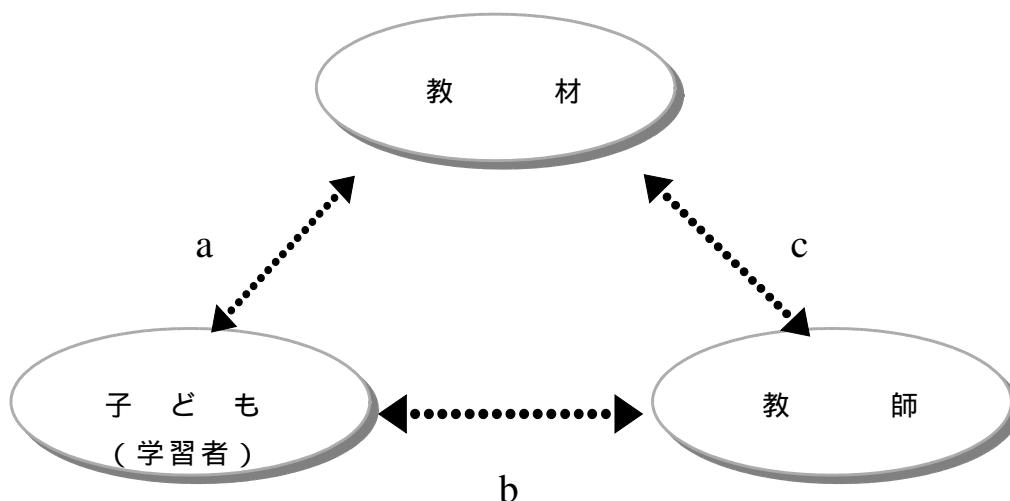
「実践的な行動力」の育成は、「授業(学習)」の中で「課題」を通して行われる。そこで、「実践的な行動力」を育成するための授業構成のアプローチの仕方として、「課題」からのアプローチを考えた。授業の最初に投げかける「問題」について児童・生徒が抱く問題点や疑問点等が「課題」であり、ここで言う「課題」とは、目標達成に向けて、児童・生徒が共有し、検討すべきいくつかの事項をさし、より具体的な行動を導き出すものである。本時の授業の中で、どのような「課題」を取り上げて議論するのか、どのようなことを思考し、表現させたいのかを考え、授業を組み立てていくことで、本時の「問題」や「活動」、さらには「支援」も見えてくるようになる。「課題」の解決を通して新たな「活動」が導かれ、また新たな「学ぶ意欲」の高まりを生み出していくのである。



評価の観点

授業の評価の観点づくりにおいては、何のために評価をするのか、そのねらいを明確にするとともに、偶発的な評価は行わないことを前提に考えてきた。そして、その評価は、「子どもの活動を根拠にした子どもの学びの改善」「よりの確な教師の指導の改善」につながるものでなければならない。子どもの学びの姿から指導の改善につながる情報を見出し、目標達成に向けたよりの確な指導の改善を図るために、評価を行うのである。

そこで本校では、教授学における授業のモデルを手がかりに、「子ども」「教材」「教師」の三者の関係から、授業を科学的に見直したり捉え直したりすることにした。



a 「子ども（学習者）」と「教材」の関係

「子ども（学習者）」と「教材」の関係においては、目の前にいる子どもたちの実態をもとに、この教材を取り上げたら、子どもたちはどのような反応を示すのか、また、この問題を提示したら、どのような思考を展開し、いかに課題を解決するための筋道を構成するのか等を十分に予想し、検討することが大切である。そうすることによって、一人一人の子どもの思考の様相に応じた、教師の具体的な支援が導かれてくるのである。

b 「子ども（学習者）」と「教師」との関係

各教科・領域の日々の学習は、連続した一連のプロセスを経て成り立っている。本時の学習は前時の上に成り立ち、次時の学習は本時の上に成り立つ。そう考えるならば、「子ども（学習者）」と「教師」との関係においては、学習の主体者である子どもたちは、前時までの学習でどのような見方・考え方を学び、それぞれの教科・領域における「学び方」をどのように身につけてきているのか等を検討することが必要である。そうすることによって、一人一人の子どもの見方・考え方と「学び方」に応じた、学習内容が導かれてくるのである。また、この教材を通してどのような「子ども（学習者）」を育てていきたいのかということも、常に考えておくことも忘れてはならない。

c 「教師」と「教材」との関係

「教師」と「教材」との関係においては、取り上げる教材の内容や、子どもたちに活用してほしい各教科・領域の見方・考え方や学び方等を考え、前時までの子どもたちの学び方をもとに、授業の「質」

を高める学習展開等を検討することが必要である。そうすることによって、目標達成に向けた一連の学習展開（授業構成と授業分析）の視点と指導の評価の視点が導かれてくるのである。

そこで、次のような評価の観点を考えた。

授業の評価の観点

- a 「教材と子ども」の関係でとらえる
 - ・ 開発した問題はどうか
 - ・ 反応予想はどうか
 - ・ 支援はどうか
- b 「子どもと教師」の関係でとらえる
 - ・ 学び方はどうか
 - ・ 身につけさせたい力はどうか
- c 「教師と教材」の関係でとらえる
 - ・ 教材の価値はどうか
 - ・ 身につけさせたい見方・考え方、学び方はどうか
 - ・ アプローチの仕方どうか

これら a, b, c については、各教科・領域の学習指導案の中において、具体的に記述するものとした。このようにして書かれた学習指導案は、本時の学習内容を示すとともに、授業者がどのような意図で授業構成をしたのかを表している。（平成17年度『研究のまとめ』研究の概要」参照）

5. 本年度の研究

昨年度の研究では、「学ぶ意欲」を高める授業構成と、「実践的な行動力」を育成するための授業構成について、それぞれ「活動」からのアプローチと「課題」からのアプローチを考えた。また、授業を「科学化」するための評価の観点として、「子ども」、「教材」、「教師」の三者の関係を考えた。そして、授業実践を進める中で、「本時の目標を明確にすること」と「本時の目標を達成するための支援の具体化」などが課題として挙げられた。

そこで本年度は、「本時の目標」をさらに明確にして、その目標を達成するための「活動」や「課題」について考えた。そして、「活動」や「課題」をより質の高いものにし、子どもの学びの質を高めるための支援について研究を進めた。そのために、副題に掲げた3つの力「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」を授業を通して培っていくという視点でもう一度捉え直すことにした。

（1）「かかわり合う力」、「適切に判断する力」、「自分を生かす力」とは

かかわり合う力

かかわり合う力の「かかわり合う」とは、他者とのかかわりのことである。価値ある教材とかかわり、自分と向き合いながら個々の学びを追究する。そして、こうした自己学習を共にする他者とかか

わかることで、的確に自分自身を知ることができ、さらなる自分づくりへとつながる。つまり、かかわり合うことによって個々の「学び」がより確かなものとなる。この「かかわり合う力」は、主に授業におけるグループ（ペアも含む）による「活動」や「課題」の解決の場面で育成されると考える。

適切に判断する力

ある問題に直面し、それを乗り越えていくためには、問題を把握し、見通しを立てながら解決へと進んでいく。その際、何をどのようにすべきなのかといった判断が絶えず要求される。したがって、授業においては、自分自身が見出した「課題」を解決していこうとする過程において、判断力は身についていく。「適切に判断する力」は、授業において、自分が感じ取ったり考えたりしたことに基づいて主体的に「活動」に取り組み、自分のよさや可能性を生かしながら「課題」を解決していくことで育成されると考える。



自分を生かす力

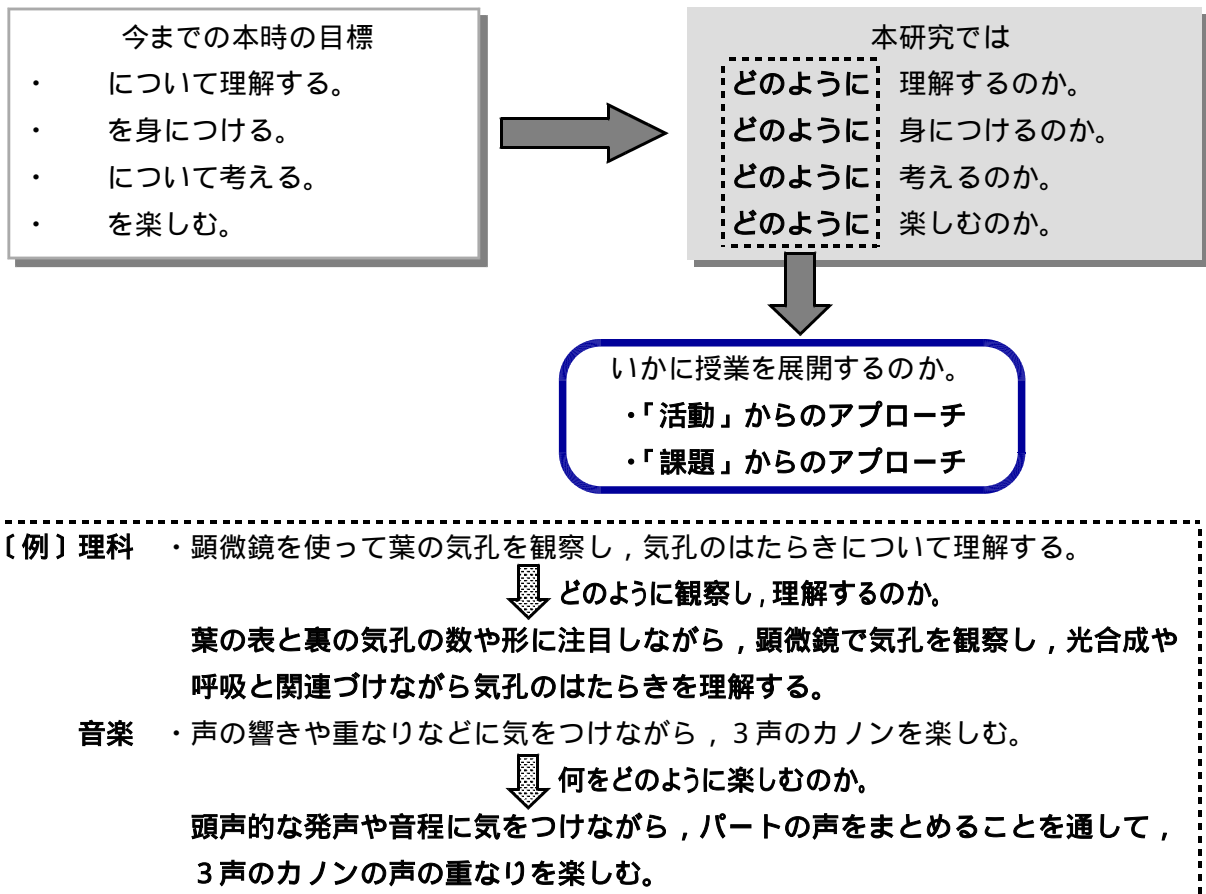
「自分を生かす力」をもった子どもたちは、生涯にわたって学び続けることができる力をもった子どもたちである。自分の「学び」を改善し、自分の限界をより広げ、深めていこうとするためには、できるだけ多様な「学び」を体験することが必要である。そして、学習を共にする他者の「学び」を受け入れる「開かれた心」をもつことにより、自分にとってよりよい「学び」を見つけることができる。「自分を生かす力」とは、多様な「学び」から自分にとってよりよい「学び」を見つけ、自分を向上させていくことができる力である。こうして生まれる自己肯定感や有能感は、学ぶ意欲や実践的な行動力をさらに高めていくと考える。



(2) 本時の目標の明確化

授業構成を考える上で、最も重要なことは本時の目標を明確にすることである。今までの指導案に書かれていた本時の目標の表現は、「について理解する。」「について考える。」「を楽しむ。」といった表現が多く、具体性に欠けていた。本研究では、どのように理解するのか、どのように考えるのか、どのように楽しむのか、といったより具体的な目標を指導案に書くこととした。これらの「どのように」の部分が、いかに授業を展開するのか、すなわち、「活動」を軸とした授業構成、あるいは「課題」を軸とした授業構成を考える柱であり、本時の児童・生徒の学び方を示すものである。





(3) 「活動」・「課題」の質を高める

「学ぶ意欲」は、「授業（学習）」における「活動」の中で生まれ、育てられるものである。また、「実践的な行動力」の育成は、「授業（学習）」の中で「課題」の解決を通して行われる。そこで、昨年度の研究では、「活動」と「課題」を次のように定義した。

【「活動」とは】
目標達成に向けて、学ぶ意欲の高まりを意図して行うものであり、児童・生徒（個人または集団）によって展開される行為。

【「課題」とは】
目標達成に向けて、児童・生徒が共有し、検討すべきいくつかの事項をさし、より具体的な行動を導き出すもの。

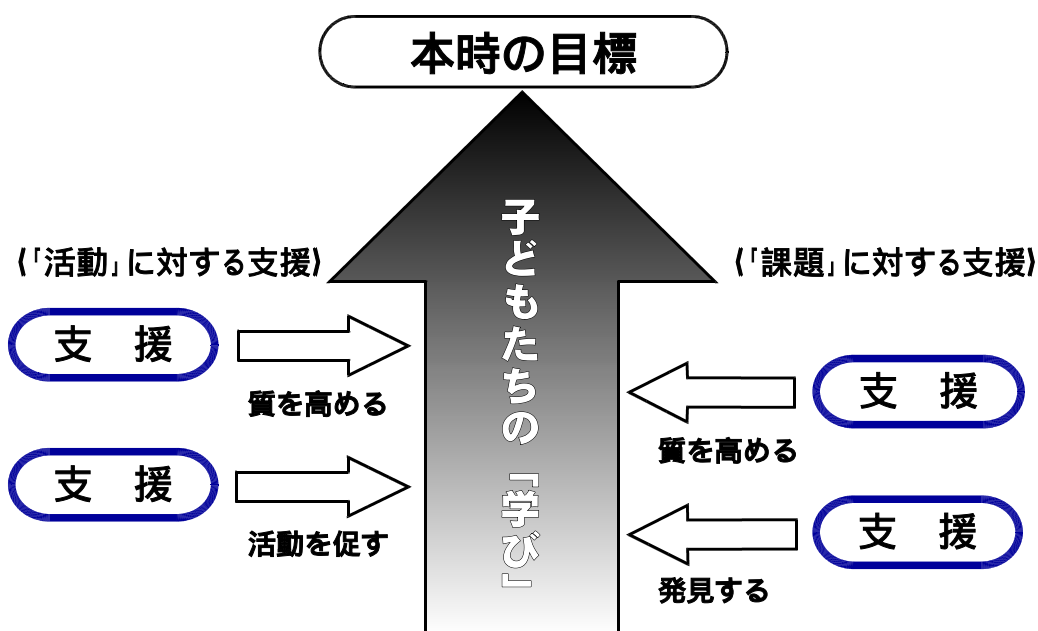
それぞれの定義にある「目標達成に向けて」というのは、単元（題材）の目標ではなく本時の目標である。そして、より具体的な本時の目標を立てることは、より質の高い「活動」や「課題」を授業の中で展開することにつながる。そして、授業の中で展開される「活動」や「課題」をより質の高いものにしていくためには、教師のよりよい支援がどうあるべきかを考えていかななくてはならない。

そこで本年度は、教師の「支援」の内容をみつめ直してみることにした。教師が授業中に行う「支援」にはいろいろな内容があるが、本研究では次のように考えた。

【「支援」とは】

本時の目標達成に向けて、よりよく「活動」を推し進め、「課題」を解決するための教師のはたらき

そして、「活動に対する支援」と「課題に対する支援」、さらに「全体への支援」と「個への支援」といった内容を意識した。このように、子どもたちの様相に応じた「支援」を考えることにより、「活動」の質を高めたり、主体的な「課題」の発見を促したりすることが、学びの質を高めることにつながると思う。



本校では、各教科・領域において、「教材」「子ども」「教師」の三者の関係（a, b, c）を視点とした授業構成と授業評価を行ってきた。そこから、次のような成果を感じつつ、実践を重ねているところである。

- ・「子ども」「教材」「教師」の三者の関係から授業を考えることによって、教師の授業構成や児童・生徒の学びの様相が明確になり、本時において達成すべき目標がより具体的になってきた。
- ・本時目標が具体的になったことによって、個々の児童・生徒の様相に応じた教師のより具体的な支援が導かれるようになった。
- ・1時間1時間の授業構成を考えることにより、各教科・領域における育てたい見方・考え方・学び方（教材の先にあるもの）が明確になってきた。

このような、本校の提案してきた「学ぶ意欲を高め、実践的な行動力を育むための授業づくり」が少しでも各校での「授業づくり」に役立てていただけたらと願っている。各教科・領域の研究・実践については、指導案および分科会資料をご覧ください。